

# IMD Directors

大阪大学微生物病研究所  
歴代所長系譜



Research Institute for  
Microbial Diseases  
大阪大学微生物病研究所

## 1934

大阪大学微生物病研究所 設立



初代 1934.9 ~ 1940.6

古武 弥四郎 Yashiro Kotake

アミノ酸、特にトリプトファンの中間代謝の研究で知られる。大阪帝国大学医学部長・和歌山県立医科大学初代学長などを歴任。帝国学士院賞。文化功労者、勲二等旭日重光章。



1934年の創立以来、微生物病研究所の歴史の中では、様々な研究者が切磋琢磨しながら傑出した功績をあげてきました。特に代々所長には、研究分野の先駆けとして日本のみならず世界の研究を牽引した研究者が数多くいます。二十余名の代々所長の系譜から、微生物病研究所の研究の歴史を紐解きます。

About RIMD

2代 1940.8 ~ 1943.7

今村 荒男 Arao Imamura



日本で初めてBCGワクチンの人体接種を行い、結核予防と治療に尽力。大阪大学第5代総長時代には、文系学部の新設に努め、それまで理系学部しかかった大阪大学を総合大学として発展させた。学会賞として「今村賞」が設立された。文化功労者。

3代 1943.7 ~ 1955.3

谷口 腆二 Tenji Taniguchi



大阪や神戸が外来伝染病の侵入門戸になりつつあったことを危惧し、関西に微生物病研究機関設立を強く要望、当時の大阪医科大学学長楠本長三郎とともに本研究所の設立に寄与した。初代微研財団理事長。帝国学士院賞。

4代 1955.4 ~ 1958.3

藤野 恒三郎 Tsunesaburo Fujino



集団食中毒の原因菌として腸炎ピブリオを発見。腸炎ピブリオの発見による公衆衛生学および適塾を中心とした医学史への貢献により大阪文化賞、また、1965年に朝日賞を受賞。紫綬褒章、勲二等瑞宝章。

5代 1958.4 ~ 1964.3

釜洞 醇太郎 Juntaro Kamahora



化学物質による細胞のがん化の研究に従事。大阪大学第9代総長、第2代微研財団理事長。従三位勲一等瑞宝章、紫綬褒賞、高松宮妃癌研究基金学術賞。

6代 1964.4 ~ 1968.3

天野 恒久 Tsunehisa Amano



細菌の毒素産生機構をはじめ、感染症を幅広く研究するとともに、日本脳炎ワクチンの改良に尽力した。第19代大阪大学医学部長、第3代微研財団理事長。1978年野口英世記念医学賞受賞。

7代 1968.4 ~ 1972.3

奥野 良臣 Yoshiomi Okuno



麻疹ウイルスの単離に米国のエンダース博士と同時期に成功。その後、麻疹ワクチンを開発。現在も用いられている、ニワトリの孵化卵を用いたワクチン製造法を世界で初めて採用した。第4代微研財団理事長。大阪文化賞受賞。

8代 1972.4 ~ 1976.3

堀 三津夫 Mitsuo Hori



今村荒男教授（第2代所長）のもと、竹尾結核研究部にて結核化学療法の基礎的研究などに従事。刀根山病院院長などを歴任。第5代微研財団理事長。

## 1967

吹田キャンパス（現在地）に移転



9代 1976.4 ~ 1980.3

川俣 順一 Junichi Kawamata



鍼灸刺激の生体反応に関する実験医学的研究など鍼灸の作用を科学的に検証した。関西鍼灸短期大学（現・関西医療大学）初代学長、日本実験動物学会理事等を歴任。第6代微研財団理事長。

10代 1980.4 ~ 1984.3

加藤 四郎 Shiro Kato



開業医をめざしていたが、釜洞醇太郎教授（第5代所長）に出会い、30代で基礎医学に転向。ウイルス封入体、鶏のマレック病やエイズウイルスの研究などに従事。高松宮妃癌研究基金学術賞。



11代 1984.4 ~ 1986.3

高橋 理明 Michiaki Takahashi

水痘ワクチンを開発。開発したワクチンは 1984 年に世界保健機関 (WHO) により水痘ワクチン予防に最適と認定され、世界各国で実用化、現在も用いられている。



17代 1997.10 ~ 2001.10

西宗 義武 Yoshitake Nishimune

専門は生殖生物学・実験動物学。精子形成の分子機構の研究などに従事。男性不妊症の原因の究明に情熱を傾けた。2005 ~ 2009 年、日本タイ感染症共同研究センター長。



13代 1988.4 ~ 1988.9

角永 武夫 Takeo Kakunaga

1987 年「癌細胞の表現形質発現の分子機構に関する研究」の業績により大阪科学賞受賞。所長在任時にがんに冒されていることが判明。亡くなる 3 日前まで発癌遺伝子の研究論文を書き続けた。高松宮妃癌研究基金学術賞。



18代 2001.10 ~ 2003.10

本田 武司 Takeji Honda

微生物病研究所附属病院で医師として勤務後、基礎研究に転向。病原性細菌に関する研究を主にし、腸炎ピブリオのゲノム解析などを行った。野口英世記念医学賞等を受賞。



19代 2003.11 ~ 2007.10

木下 タロウ Taroh Kinoshita

細胞膜上に特殊な構造でアンカーされている GPI アンカー型タンパク質研究の世界的第一人者。GPI 欠損症の解明にも尽力。2007 年 ~ 2017 年 IFReC 副拠点長を兼任。2017 年度武田医学賞。



21代 2011.10 ~ 2015.10

目加田 英輔 Eisuke Mekada

細胞増殖因子 HB-EGF の生体内における生理機能解明に尽力。HB-EGF が、がんや臓器の形態形成を始め様々な機能を持つことを明らかにした。



12代 1986.3 ~ 1988.3

三輪谷 俊夫 Toshio Miwatani

大阪大学医学部在学時、藤野恒三郎教授 (第 4 代所長) の腸炎ピブリオ発見を目の当たりにし、病原細菌学研究の道に進んだ。主に細菌による腸管感染症の研究に従事、1982 年日本細菌学会賞 (浅川賞)。

1993

本研究所附属病院が  
医学部附属病院と統合・合併

2001

21 世紀 COE  
「感染症学・免疫学融合プログラム」が採択

2005

・日本・タイ感染症共同研究センターの始動  
・感染症国際研究センターの設置



20代 2007.10 ~ 2011.10

菊谷 仁 Hitoshi Kikutani

免疫反応調節機構の解明に取り組む。様々なリンパ球機能分子が抗体産生に関与するメカニズムを明らかにした。2009 年文部科学大臣表彰科学技術賞。



14代 1988.11 ~ 1990.10

藤尾 啓 Hajime Fujio

免疫反応の分子メカニズムを明らかにし、タンパク質を抗原とした免疫化学の発展に貢献。病にたおれた角永武夫前所長の代理、そして後任所長として現在も続く大部門制を定着させた。



16代 1993.10 ~ 1997.10

羽倉 明 Akira Hakura

ヒトパピローマウイルスなど発がん性ウイルスのがん化機構の研究に従事。所長時代にはエマージング感染症研究センターの立ち上げに奔走。現在も続く、同窓会美術展を開始。



15代 1990.11 ~ 1993.10

豊島 久真男 Kumao Toyoshima

1969 年に世界で初めてトリ肉腫ウイルスからがん遺伝子を発見。当分野の先駆けとしてその後のがん研究に大きな貢献を果たす。ヒトクローン倫理問題やヒト ES 細胞研究の委員会で主査などを歴任。1998 年文化功労者。2001 年文化勲章。

2007

世界トップレベル国際研究拠点  
「免疫学フロンティア研究センター」始動



2011

文部科学省共同利用・共同研究拠点として  
活動開始

2008

グローバル COE「オルガネラネットワーク  
医学創成プログラム」が採用

2015

BIKEN 次世代ワクチン協働研究所の設置